博士学位論文

内容の要旨

および

審査の結果の要旨

【第２３号】

２０１５

日本社会事業大学

大学院社会福祉学研究科

はしがき

本編は学位規則（昭和２８年４月１日文部省令第９号）第８条による公表を目的として、平成２７年度に本学において博士の学位を授与した者の、論文内容の要旨および審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は学位規則第４条第１項（いわゆる課程博士）であり、乙は同条第２項（いわゆる論文博士）によるものであることを示す。

目　　次

［課程博士］

学位記番号 学位の種類	氏　名	論文題目	
甲第 61 号			1 頁
博士（社会福祉学）	趙　正祐 Jeong Woo CHO	社会福祉領域における援助者支援の構築に関する研究 －児童養護施設職員の「共感満足」に着目して－ A study on the construction of support for Caregivers in the social welfare area －Focusing on "compassion satisfaction" of Caregivers in Child Care Facilities－	
甲第 62 号			7 頁
博士（社会福祉学）	岩田　千亜紀 CHIAKI　IWATA	高機能自閉症スペクトラム障害（ASD)圏の母親への子育て支援に関する効果的プログラムモデル開発 －母親のストレングス(特性)を踏まえた協働による支援－ Development of an Effective Program Model for Mothers with High-Functioning Autism Spectrum Disorders (HF-ASD) in Raising Children -Collaborative Support Based on Strength of Mothers-	
甲第63号			14頁
博士（社会福祉学）	VIRAG VIKTOR	日本における効果的な多文化ソーシャルワーク教育プログラムの構築 文化的力量のある社会福祉専門職の育成に向けて Developing an Effective Educational Program for Cross-cultural Social Work　in Japan To Train Culturally Competent Professional Social Workers	

氏名	趙　正祐
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 61 号
学位記授与の日付	2015 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	社会福祉領域における援助者支援の構築に関する研究 －児童養護施設職員の「共感満足」に着目して－ A study on the construction of support for Caregivers in the social welfare area －Focusing on "compassion satisfaction" of Caregivers in Child Care Facilities－
論文審査委員	審査委員長　北島　英治 審査委員　藤岡　孝志　（主指導教員） 審査委員　大嶋　巌　（副指導教員） 審査委員　手島　陸久 審査委員　木村　容子

社会福祉領域における援助者支援の構築に関する研究

－児童養護施設職員の「共感満足」に着目して－

日本社会事業大学大学院博士後期課程　社会福祉学研究科　趙正祐

近年、社会情勢や産業構造の変化を反映したように、各産業の従事者においても心身への不調による職場の生産性の低下など、社会的に大きな損失を招くため、その取り組みが重要である。その中、社会福祉職に携わっている援助者は、深刻な心身の状況にさらされていることが報告されており、利用者へのサービスの質の低下が懸念されている。特に児童養護施設は、被虐待児などの多様な入所児の増加による援助者の負担が、逆に不適切な関わりを起こりうる可能性が指摘されている。一方で利用者を助けたり、仕事仲間に支えられたりすることで、ポジティブな自己変容や変化が生じることもあり、援助者のネガティブな影響を乗り越える手掛りとして期待する議論もある。そこで、本研究は、児童養護施設の援助者のポジティブな変容の共感満足に着目し、援助者支援モデルを構築し、その要因や影響を明らかにすることで、援助者支援への提言をすることを目的とする。研究方法は、児童養護施設の職員を対象とし、ナラティブとエビデンスの両方を重視した混合研究法を採択し、結果の信頼性と妥当性を高めることを試みた。質的調査では、共感満足を含め、ポジティブな要素が援助場面で具現化していることを明らかにした。3 つのカテゴリーと9 つのサブカテゴリー、22 の概念が生成されて共感満足を導く要因と影響に基づき、本研究の援助者支援モデルを精緻化した。量的調査では、質的調査の結果に基づき、さらに、エビデンスを求め、援助者支援モデルを検証することができた。その結果、児童養護施設の特性を踏まえた共感満足の要因は、援助者要因と施設環境要因に分けて影響されることが示された。援助者要因は、勤務年数、心理キャピタル、家族や友人からの支えが、施設環境要因は、職場の雰囲気、施設形態（小舎）が重要な要因として示され、援助者支援において個別支援と集団支援へのアプローチが重要であることが示唆された。

Abstract

A study on the construction of support for Caregivers in the social welfare area
－Focusing on "compassion satisfaction" of Caregivers in Child Care Facilities－

Jeong Woo CHO

In recent years, as a reflection of the changes in industrial structures and social conditions, there has been a decrease in workplace productivity due to worsening mental and physical conditions of workers across all industries. This creates a huge drain on society and is therefore a problem which needs to be addressed. Within this problem, it is well known that aid workers in the social welfare sector are subjected to very serious mental conditions, and there is concern that this leads to the lowering quality of services for those in need. Particularly in child care facilities, this can be shown as pressure on caregivers from the rise in the number abused children from various situations possibly giving rise to inadequate relationships. In contrast to that, there are cases where caregivers help others and are supported by their co-workers, which leads to positive changes personal development, and some argue that they can be expected to overcome the negativity of their surroundings. Therefore, the aim of this study is to propose support to caregivers by bringing to light their environment and primary factors by building a model for aid worker support, giving attention to the compassion-satisfaction of positive change in caregivers at child care facilities.

The methods used in this study include using caregivers at child care facilities as the subjects give equal weight to the mixed methods emphas on narrative and evidence, and testing the increasing validity and credibility of the results.

Through qualitative research, were made clear the embodiment of positive aspects at field of assistance, including compassion-satisfaction from ten caregivers. The compassion-satisfaction of positive change, which had 22 general categories; three main categories with 9 sub categories, displayed things like "sense of accomplishment and worth related to the children", "sense of accomplishment and worth regarding your work colleagues", "sense of accomplishment and worth as an caregivers " and "affirmation as an caregivers ", and formed a model almost identical to the results of previous research. Furthermore, as factors which promote this kind of compassion-satisfaction, "affirmative psychological capital" and "support from family

and friends" provoked thought on how to support caregivers. Also, compassion-satisfaction displayed a connection to "raising the quality of life for caregivers themselves" and "implementation of better child care " for the children. It also measures the refinement of the support models for a caregivers which are focused on compassion-satisfaction, as well as being able to realize the influence of compassion-satisfaction from promotion factors. Furthermore, in our substantive study, we were able to verify the model for support for caregivers and by requesting evidence based on the results of qualitative research.

As a result of an inquisitive study of 328 child care facilities caregivers, the primary factors for compassion-satisfaction in child care facilities especially were shown to affect the split in primary factors for caregivers and primary environmental factors of the institution. Also, it suggested that compassion-satisfaction gave positive influence to the nature of the aid workers and their relationships with the children. So, the primary factors for caregivers were the number of years worked, psychological capital and the support of family and friends, while it suggested the primary factors of the institutional environments were workplace atmosphere and the type of the facilities ("Small house": same 12 people or less), and it suggested that it was important to use an approach to the problem which includes both individual support as well as group support.

【審査結果の要旨】

1　審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第 3 次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員 5 名が担当した。5 名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	北島　英治	ソーシャルワーク論
審査委員	藤岡　孝志	子ども家庭福祉　臨床心理学
審査委員	大嶋　　巌	精神保健福祉　福祉プログラム評価
審査委員	手島　陸久	医療福祉、地域ケア
審査委員	木村　容子	子ども家庭福祉　子育て・親育ち支援

2015 年 5 月 29 日までに提出された第 3 次予備審査博士論文について審査委員がそれぞれ精読し、6 月 20 日の公開口述試験を受けて、各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ 7 月 31 日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行い、5 名の審査委員全員が第 3 次予備審査の評価を合格とし、審査委員会においての合格が了承された。次いで、9 月 4 日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達し、審査委員 5 名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2015 年 9 月 17 日の社会福祉学研究科委員会に審査結果を提案し了承・議決を得た。本学は、これらの手続きを経て、2015 年 9 月 24 日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

2　博士論文の評価

被虐待児の増加により生み出されている児童養護施設職員への援助者支援は重要な課題になっている。この課題に対して、援助者のポジティブな変容である共感満足に注目し、援助者支援モデルを構築し検証した意義のある論文である。実践的にも研究的にも重要なテーマに、正面から精力的に取り組み、先行研究のレビューも十分な水準に達している。従来の「共感疲労」等のネガティブな側面の指標のみでなく、「共感満足」というポジティブな側面の指標に着目して考察するという点でオリジナリティと社会的意義を持ち、これまでの共感満足研究にとどまらず、ひろく、共感疲労やバーンアウト研究に触れながら、援助者支援領域におけるポジティブな視点である共感満足の持つ意義を述べたうえで、面接調査による質的なデータ解析を行ない、理論仮説を精緻化し、さらに、全国の児童養護施設を視野に入れた質問紙調査を通して仮説検証を試みている。研究の背景にある児童養護施設および職員にある問題背景をよくつかんで研究目的を設定し、研究方法も極めて吟味され混合研究法により系統立てて解析し、考察においても、先行研究からの知見をよく活かして論立てされ、本論文は博士論文に求められる水準を十分に満たし、高く評価できる。

3　最終試験の結果

大学院博士前期課程そして本学の後期課程において一貫して、重要な課題である被虐待児の増加により生み出されている児童養護施設職員への援助者支援の研究に取り組み、論文を発表している。博士論文では、児童養護施設の援助者に対して、「共感疲労」にとどまらず「共感満足」というポジティブな側面をも視野に入れた「援助者支援」のあり方について、先行研究のレビューも丁寧に行い、新しい分析手法である階層的線型モデル（Null モデル）を積極的に取り入れ、量的研究については意欲的に全国の 75 施設、援助者 600 人を対象に代表性に配慮した調査研究を実施して質的研究と量的研究の混合手法を用い、ナラティヴと科学的エビデンスの両側面から援助者支援モデルの検証を行っており、博士（社会福祉学）にふさわしい実践的研究能力と学識を有していると結論する。

氏名	岩田　千亜紀
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 62 号
学位記授与の日付	2016 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位論文題目	高機能自閉症スペクトラム障害（ASD)圏の母親への子育て支援に関する効果的プログラムモデル開発 －母親のストレングス(特性)を踏まえた協働による支援－ Development of an Effective Program Model for Mothers with High-Functioning Autism Spectrum Disorders (HF-ASD) in Raising Children -Collaborative Support Based on Strength of Mothers-
論文審査委員	審査委員長　後藤　隆 審査委員　大嶋　巌　（主指導教員） 審査委員　藤岡　孝志　（副指導教員） 審査委員　佐藤　久夫 審査委員　小田　美季

論文要旨（和文抄録）

本研究の目的は、高機能自閉症スペクトラム障害（ASD）と診断された母親およびその疑いのある母親の育児困難の軽減のために、母親の多様なニーズに合致した効果的な子育て支援プログラムのモデルを形成することである。

研究方法としては、プログラム評価方法を援用して、プログラム評価手法の第一ステージである「開発評価」を実施し、インパクト理論およびプロセス理論による、新規の効果的な子育て支援プログラムのモデル構築を目指した。また、ニーズ評価においては、グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した。

本研究では、まず体系的な文献レビューを行い、それを基に高機能 ASD 圏の母親を対象とした暫定版の子育て支援プログラムのモデルを理論的に提示した。続いて、当事者による手記分析と当事者へのインタビュー調査、さらに「妊娠・出産包括支援モデル事業」を実施した市町村の保健師らを対象とした質問紙調査によるニーズ評価を実施した。そして、それらの分析結果や追加調査、評価可能性アセスメントの結果を踏まえて、高機能 ASD 圏の母親に対する子育て支援プログラムの最終化を行った。最終化された子育て支援プログラムのインパクト理論では、当事者との協働によって、高機能 ASD 圏の母親の特性（ストレングス）への気づきを促進し、それによって母親のハーディネスの構築とソーシャルサポートの活用に繋げ、母親の育児困難の軽減、ウェルビーイングの向上を目指した理論的モデルへと改善を行った。

本研究における高機能 ASD 圏の母親への子育て支援モデルは、開発段階の理論モデルであり、本研究には多くの研究課題が残されている。しかし、本研究では、高機能 ASD

圏の母親の子育て困難や支援ニーズ、支援の実態を新たに示すなど、今後の実践や研究の発展にも寄与しうる重要な知見を創出できたと考えられる。

Abstract

Development of an Effective Program Model for Mothers with High-Functioning Autism Spectrum Disorders (HF-ASD) in Raising Children -Collaborative Support Based on the Strength of Mothers -

Chiaki Iwata

Background

Mothers who have, or who are suspected of having, high-functioning autism spectrum disorder (HF-ASD) have various difficulties with pregnancy, giving birth and raising children. Some HF-ASD mothers were not able to care for their children as they intended and developed serious depression as a result. However, there is little literature about mothers with HF-ASD raising children. Thus, research to develop an effective program model for these mothers is clearly necessary.

Purpose

Based on the needs evaluation of the HF-ASD mothers, this study aimed to develop an effective program model for the HF-ASD mothers in raising children that meets their various needs and to reduce the difficulties faced by HF-ASD mothers in raising children.

Method

In the development of the program model, program evaluation theory was utilized. The effective program model that was developed consisted of impact theory and process theory. Grounded Theory Approach (GTA) was also adopted as a needs evaluation.

Results

The study consisted of literature review, an empirical study and model developments.

Prior to the empirical study, a literature review of former studies was conducted. The literature review suggested that utilization of social support for mothers and the encouragement of greater hardiness in mothers contributed to a reduction of the stress of mothers and in adequate nurturing. Based on the results of the literature review, a tentative and theoretical program model for mothers with HF-ASD was developed. The

target population of the tentative impact model was all mothers who have, or who are suspected of having, HF-ASD having difficulties in raising children. The model aimed to help meet their needs and their specific traits by providing seamless support from their pregnancy.

Secondly, two kinds of qualitative empirical studies—namely, an analysis of accounts from mothers with HF-ASD and individual interviews with them—were conducted in order to clarify the special needs and difficulties of these mothers in raising children. Further, the questionnaire survey was conducted to obtain more information about the practitioners in their communities. The program model for the HF-ASD mothers who are raising children was finalized based on the analysis of the above studies, additional studies and evaluability assessments.

In the finalized program model, the target population of the model was HF-ASD mothers who were pregnant and/or had infants and small children, regardless of whether the mother had been diagnosed with ASD and was self-aware of the difficulties in raising children.

In the finalized impact model, collaborative support led HF-ASD mothers to counseling, where they became more aware of their own strengths. This is intended to reduce the difficulties faced by the mothers, as well as to increase their appropriate childcare actions and improve the well-being of the mothers and their families. In addition to this, the supportive system was modified to cooperate with local related departments in the communities.

Discussion

This study developed a program model for HF-ASD mothers in raising children. The model remains a tentative and theoretical model. Various research tasks also remain. However, this study clarifies the special needs and difficulties in raising children among HF-ASD mothers and also newly identifies actual supportive conditions for the mothers. Thus, this study creates new observations that contribute to further practices and studies for the mothers with HF-ASD.

Continuous revisions of the model for HF-ASD mothers through the practice of the model and practical EBP model of the HF-ASD mothers are needed in the future.

【審査結果の要旨】

1　審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第 3 次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員 5 名が担当した。5 名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	後藤　隆	社会調査法、社会調査史
審査委員	大嶋　巌	精神保健福祉　福祉プログラム評価
審査委員	藤岡　孝志	子ども家庭福祉　臨床心理学
審査委員	佐藤　久夫	障害者福祉
審査委員	小田　美季	障害者福祉

2015 年 10 月 30 日までに提出された第 3 次予備審査博士論文について審査委員がそれぞれ精読し、11 月 28 日の公開口述試験を受けて、各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ 1 月 22 日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行い、5 名の審査委員全員が第 3 次予備審査の評価を合格とし、審査委員会においての合格が了承された。次いで、2 月 5 日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達し、審査委員 5 名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2016 年 2 月 18 日の社会福祉学研究科委員会に審査結果を提案し了承を得た。本学学長は、これらの手続きを経て、2016 年 3 月 18 日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

2　博士論文の評価

岩田論文は、プログラム評価手法を用いた、高機能自閉症スペクトラム障害(ASD)の母親を対象とした子育て支援プログラムのモデル構築を目的としたものである。今後の EBP 研究への展開のベースとなるモデル構築であり、その障害特性から子育てに特有の困難を有するが社会的支援は十分ではない高機能自閉症スペクトラム障害(ASD)圏の母親の子育て支援について、内外の先行研究をふまえたうえで、プログラム評価の枠組みに即し、主として、当該母親の手記分析、インタビュー分析の２つの質的分析によるニーズ評価、支援者である保健師への質問紙調査結果の量的分析、さらに子ども家庭支援センターへの追加調査、当事者、支援者との意見交換、を積み重ねたものとなっている。グレーゾーンまで含めた高機能 ASD 圏の母親を対象に、母親の困り感を契機とした、母親自身の腑活、障害特性に見合うアセスメント、必要な社会的資源動員を可能とするネットワークをもつ支援の発動につき、暫定的な支援プログラムモデルを提示している点にオリジナリティがあり、また、子育てに困難を持つ当該母親への社会的支援が十分とはいえない我が国現況に照らし、社会的意義も大きい。

本研究分野における調査対象選定の制約下ではあるが、今後の実践プログラムや EBP 研究に有用

な一定の知見を得ており、我が国においても、発達障害児・者へのアセスメント、支援体制の整備が進められようとしている渦中、発達障害当事者かつ母親を対象とする本研究は有意義である。以上から、博士論文として十分な水準に達していると評価した。

3　最終試験の結果

プログラム評価の枠組みに即した論文構成、内外の関連先行研究サーベイ、質的分析、量的分析の積み上げからみて、本研究分野における調査対象選定等の制約はぬぐえないものの、今後の実践プログラムやEBP研究に有用な一定の知見を得ており、科学的な研究能力を示しているものと判断する。審査委員の指摘については、加筆修整により対応がなされている。支援対象像を必ずしも医学的な診断が明確でないグレーゾーンに拡げていること、母親への腑活、障害特性に見合うアセスメント、必要な社会的資源動員を可能とする協働支援の発動につき、暫定的な支援プログラムモデルを提示していることから、社会福祉実践に係る実践的研究能力を示しており、本論文は、社会福祉学における障害者福祉、援助分野における重要な貢献であり、十分な当該学識を示している。研究のオリジナリティ、社会的意義共に、博士論文の水準に達しており、社会福祉学に関する豊かな学識と実践的研究能力を有していることから博士（社会福祉学）をうけるにふさわしいと判断する。

氏名	VIRAG VIKTOR
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 63 号
学位記授与の日付	2016 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位論文題目	日本における効果的な多文化ソーシャルワーク教育プログラムの構築 文化的力量のある社会福祉専門職の育成に向けて Developing an Effective Educational Program for Cross-cultural Social Work in Japan To Train Culturally Competent Professional Social Workers
論文審査委員	審査委員長　佐藤　久夫 審査委員　植村　英晴　（主指導教員） 審査委員　北島　英治　（副指導教員） 審査委員　小原　眞知子 審査委員　斉藤　くるみ

VIRÁG Viktor　　ヴィラーグ　ヴィクトル

日本における効果的な多文化ソーシャルワーク教育プログラムの構築
文化的力量のある社会福祉専門職の育成に向けて
（論文要旨）

本論文の目的は「日本における文化的に多様な人々に対応できる能力，即ち文化的力量をもつソーシャルワーク専門職の効果的な教育プログラムの構築」であった．最初に，実証研究に向けた基盤研究に従事した．日本における文化的な多様化と文化的に多様な人々の周縁化を示す既存の統計データと，ソーシャルワーク実践及び教育に係る文化的な多様性に関する国内外の専門基準の調査を行い，研究の社会及び専門的背景と意義を示した．国内外の先行研究の検討から，文化的力量モデルの採用を結論づけた．移民国家 4 カ国の訪問調査を実施し，文化的な多様性に関するソーシャルワーク教育の比較検討から，文化的認識とそれを促す参加型教育の重視を指摘した．次に，教育実験による介入研究のために基礎材料を作成した．ラムによる「ソーシャルワークにおける文化的力量の自己アセスメント・テスト」の日本語版を作り，A 大学における調査で信頼性と妥当性について検討した．また，国際的な専門書等を参考に，採用した理論枠組みに沿って，文化的力量の 3 領域（認識・知識・技術）と 24 要素を網羅し，導入・認識・知識・技術編からなる教育プログラムを作った．最後に，A 大学において介入群と統制群を設定し，プログラムによる教育実験を実施した．プログラム効果を，作成したテストによる量的分析と，自由記述内容のラベル化・カテゴリー化による質的分析で確認した．量的研究では文化的力量全体及び認識・知識・技術の 3 力量領域の向上を，質的研究では，学習効果・意識変容・行動意欲の 3 種類のプログラム効果と参加者によるプログラム，特に認識編の肯定的な評価を確かめた．よって，研究目的が達成された．

VIRÁG Viktor ヴィラーグ　ヴィクトル

Developing an Effective Educational Program for Cross-cultural Social Work in Japan

To Train Culturally Competent Professional Social Workers

(Paper abstract)

The purpose of this dissertation was to ‘develop an effective educational program to teach cultural competence to professional social workers in Japan’.

First, I engaged in ground research towards empirical research. I surveyed existing statistical data on the cultural diversification of Japan and the marginalization of culturally diverse people, and international and domestic professional standards on social work practice and education associated with cultural diversity, and showed the social and professional background of the study and its rationale. By examining prior research, I concluded on adopting a cultural competence framework. Based on field surveys to four immigrant nations and comparison of social work education related to cultural diversity, I indicated focusing on cultural awareness and participatory learning for facilitating it.

Next, I prepared basic material for an intervention study by an educational experiment. I prepared a Japanese version of the ‘Social Work Cultural Competencies Self-Assessment Test’ by Doman Lum and studied its reliability and validity through a survey carried out at College A. Also, based on international textbooks, I formed an educational program consisting of introductory, awareness, knowledge and skills parts according to the adopted theoretical framework covering the three cultural competence areas (awareness, knowledge, and skills) and 24 competencies.

Finally, I set up intervention and control groups at College A and conducted an educational experiment using the program. I confirmed program effectiveness by quantitative analysis using the prepared test, and by qualitative analysis through labeling and categorization of free comment data. In the quantitative study, I confirmed the increase of overall cultural competence and the three areas of awareness, knowledge, and skills. In the qualitative study, I observed three types of program effectiveness, namely learning outcomes, change of consciousness, and desire to act, and also positive evaluation of the program by participants, especially of the awareness part. Hence, the purpose of the research was fulfilled.

【審査結果の要旨】

1　審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第 3 次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員 5 名が担当した。5 名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	佐藤　久夫	障害者福祉
審査委員	植村　英晴	障害者福祉
審査委員	北島　英治	ソーシャルワーク論
審査委員	小原　眞知子	ソーシャルワーク理論・援助技術開発
審査委員	斉藤　くるみ	英語学、言語学

2015 年 10 月 30 日までに提出された第 3 次予備審査博士論文について審査委員がそれぞれ精読し、11 月 28 日の公開口述試験を受けて、各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ 1 月 22 日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行い、5 名の審査委員全員が第 3 次予備審査の評価を合格とし、審査委員会においての合格が了承された。次いで、2 月 5 日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達し、審査委員 5 名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2016 年 2 月 18 日の社会福祉学研究科委員会に審査結果を提案し了承を得た。本学学長は、これらの手続きを経て、2016 年 3 月 18 日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

2　博士論文の評価

本論文は、「日本における文化的に多様な人々に対応できる能力、即ち文化的力量(cultural competence)をもつソーシャルワーク専門職の効果的な教育プログラムの構築」を研究目的としている。この分野は、国際化、グローバル化が進む中で、我が国において十分に取り組まれてこなかったものであり、その社会的意義は大変大きい。本研究はその中でも専門職養成のための教育プログラム開発という、重要でとくに新しい課題に焦点を当てている。研究の準備段階として、国内外の詳細な文献調査、それにもとづく理論枠組みの整理、米国など先進４か国の学士課程への訪問調査、倫理的配慮などがなされた。本研究の中心は、米国の多文化ソーシャルワーク教育プログラムを翻案し、社会福祉学部の学生に教育的な介入実験を行い、その結果を量的・質的に分析し、その妥当性・有効性を検証したことである。この教育プログラムは、文化的力量枠組みの３領域(認識・知識・技術)と２４要素を網羅し、導入編・認識編・知識編・技術編から構成され、参加型学習を促すものである。また、その検証に必要な効果測定ツールを開発すべく、「文化的力量」に関する英文の標準化されたスケールを、作者の承諾を得て邦訳し、信頼性と妥当性を確認し、介入実験に使用した。文化的力量に関する学習効果を測定する有効な日本語のツールが開発されたといえ、この点も本研

究の大きな成果といえる。今後、より量的にも多くの、かつ多様な属性をもつ対象者(学生・院生・学年・文化的背景)を対象とした介入研究や、多様な文化的背景の担当教員による介入研究など、より一般化するための取組が期待され、そうした今後の検証に十分値するオリジナルで信頼性のある知見が得られたといえる。以上から、博士論文として十分な水準に達していると評価した。なお、今日の世界はテロの脅威にさらされ日本も例外ではない。こうしたテロの背景に文化・宗教・民族の間の社会的格差と無理解の問題が指摘されており、ソーシャルワークはこの問題の解決に一定の貢献をなしえる社会的な対応である。Virag Viktor 氏が本論文の執筆を開始した時以上に今日ではこの研究の重要性が増しており、このテーマでの今後の氏の一層の研究を期待する。

3　最終試験の結果

本論文は、本論文は、「日本における文化的に多様な人々に対応できる能力、即ち文化的力量(cultural competence)をもつソーシャルワーク専門職の効果的な教育プログラムの構築」を研究目的とし、米国で開発された文化的力量を評価するスケールの日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を確認し、文献をもとに開発した教育プログラムを実施し、そのスケールを用いて有効性を検証したものである。この博士論文には、高度の実践的研究能力や幅広い社会福祉学の学識が伺われ、また、口述試験その他の審査過程を通じて学術的誠実な対人関係能力が伺われた。博士（社会福祉学）にふさわしい実践的研究能力と学識を有していると評価する。